

講 評

桑原保光



ただいまご紹介をいただきました桑原でございます。私は獣医師でもありますので、獣医師の観点から講評をさせていただきます。

本日は、唐木先生の基調講演をはじめとして、口頭発表やパネル発表をいただきました。いずれも実践的で先進的であり、ほかの方々の手本になる発表であったと思えました。この会場にいらしている方々は、実践例もよくご理解いただいておりますし、いろいろな経験をなさっている方々で、いわばベテラン的な存在かと思えます。現状として考えますと、多くの学校などで、どう動物を飼ったらよいか、どう世話をしたらよいか悩んでおられる先生方が大勢いらっしゃるのではないのでしょうか。そこで、獣医師と連携をしながら、どのように飼育したら、子どもたちの教育のためになるのか、動物が心地よく生活できるのか、幅広い視点で考えて取組をしていかなければならないのではないのでしょうか。

そこで、やはり学校や園で動物を飼育する場合には、飼育規準、つまり、ウサギだったらウサギの習性を理解したり、室内飼育だったら、また野外飼育だったらどのように飼育したらよいかということ、北海道から沖縄まで、それぞれの気候に応じた、また地域の特色に応じた基準を設定

し、その基準に基づいて先生方が飼育をすれば、どのように飼育したらよいかということは解消されます。そして、一步進んで、どのように飼育動物を活用すれば、子どもたちにとって良い教育ができるのかということを考えられるようになるのではないのでしょうか。

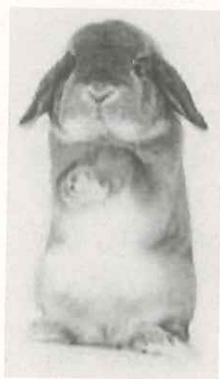
いろいろな小学校を私も見させていただいておりますが、餌やりや掃除という活動が主体で、飼育委員会など、限られた学年がそれに携わっており、学校全体として飼育に取り組んでいる学校が少ないように思います。今後は系統立てて、1年生から始める形で、生活科から理科へ、科学的な視点を養えるような取組を考えていく必要があるのではないかと思います。

具体的には、ウサギの抱き方であれば、先ほど質問にありましたが、暴れるウサギをどう抱かせたらよいかとか、いろいろな問題があります。そこで、ウサギを抱かせるときには、落として骨折をさせないように座って抱かせるとか、暴れるウサギがいればタオルで来るんであげたりとか、いろいろな工夫の仕方があります。このようなことを、規準として作成して、皆様にお伝えするのも、この研究会の課題でもあると思えます。

鳩貝先生もお話になったように、子どもの発達段階に応じた動物の与え方が必要ですが、その場合、与える側が動物について熟知している必要があります。教師は、子どもが「このウサギかわいい」と言ったら、それに共感できるようにでなければなりません。また、動物なら何でも良いのかということになったときには、子どもの体力や特性に応じた動物を与える必要があります。イヌで言えば、セントバーナードからチワワまで大きさは大きく違うわけで、小学生にはチワワは面倒見られますが、セントバーナードは無理なわけです。それはウサギにも言えて、800gの小さな温厚なウサギから10kgの大きなウサギまでいます。今飼っているウサギが、ふれあいに用いる場合本当に適当であるかという疑問も持っています。ホーランドドロップというおとなしいウサギもいますし、このウサギだったら大丈夫という判断

の下、子どもたちに触れさせる必要があるのではないかと思います。

そのようなことを考えるときに、先生方と獣医師の側でコミュニケーションをとっていかねばならないと思います。今までの学校飼育動物はどちらかという誤解があるのではないかと思います。動物愛護に意識の高い獣医師や動物愛護団体の人たちから見れば、今学校での飼育の現状は、動物虐待だという考えもありますし、たくさんの動物がいることがにぎやかで良いとか、ケンカをしたりして死んでいくことも弱肉強食の世界を見ることが良いことだという考えもあります。こういったことを整理しながら、飼育をするときの規準を作っていく時期に来たのではないかと思います。



本日の発表について、各地域にお帰りになったら、こんな発表があったということを、是非お伝えください。これから活動の参考にさせていただければと思っております。やはり、子どものために動物をどのように活用したらよいのかということが本来の目的でありますので、目的をもって動物を飼育し、それに結果がついて来るといった段階を踏んで、子どもは体験をし、その体験からいろいろなことを学ぶという原点に立ち返って、動物飼育にあたっていただければありがたいと思います。

(群馬県獣医師会・群馬県教育委員長)